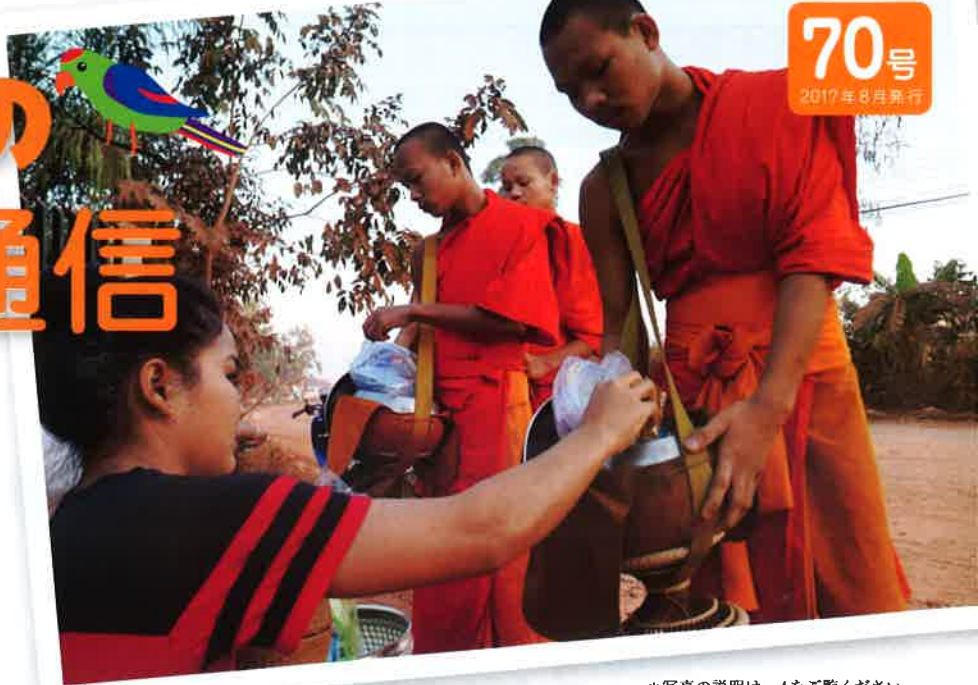


ラオスの こども通信

70号
2017年8月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 村の挑戦!「ラオスのこども」の挑戦! ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす [2017.5-2017.7] ▶ p.3
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほとり「染」 ▶ p.4



*写真の説明はp.4をご覧ください。

村の挑戦!「ラオスのこども」の挑戦!

事務局長 野口 朝夫

「ラオスのこども」は、現在、「図書室を村にも」とのスローガンのもと、「学校図書室の地域への展開」を進めています。2県6郡の小学校または中等学校(中学+高校)16校に学校図書室を開設し、さらに、それぞれの分室として16の地域文庫の開設を支援しました。



お寺の空き部屋に開いた地域文庫(ヴィエンチャン県サナカーム郡)



地域文庫の展開

「ラオスのこども」は、これまで学校図書室をラオス全国300か所に設置してきた経験を踏まえ、読書習慣の定着には学校だけでなく、学校を取り囲む地域、親が読書好きになる必要があるとの判断から、このプロジェクトを立案し、JICA(独立行政法人国際協力機構)草の根技術協力事業として実施しています(2014年2月~2018年1月)。ラオスでは地域文庫は極めて少なく、村にとっても、「ラオスのこども」にとっても大きな挑戦です。

「生まれて初めて、教科書以外の本を読みました!」

4月末、私はヴィエンチャン県フアン郡(首都ヴィエンチャンから車で約3時間)での事業を視察しました。その日は土曜日。村の集会所に開いた「地域文庫」の開館日でした。村長さんが開館の知らせを放送すると、子どもを含む20人ほどの子どもたち、村人がやってきました。

その中に、この地域文庫で本の整理や貸出のボランティアをしているブンタンさんがいました。私たちに、ブンタンさんはこの地域文庫が開設されて、「生まれて初めて、教科書以外の本を読みました!」と話してくれました。

小学校を出ている彼女は、字が読めない訳ではありません。お米の仲買を手掛ける夫、20歳の娘さんと17歳の息子さんと四人の生活は安定しており、本を買うお金がない訳でもありません。



地域文庫ボランティアのブンタンさん

でも村にも、近くにも、図書室はもちろん本屋など本と出会える場所がなく、これまで本に接する機会が無かったのです。政府はラオスの成人識字率を90%以上と言っていますが、実際には、日頃から本に接することができない厳しい環境に多くの人がいることを、改めて知らされました。

「もっと本が欲しい!」

地域文庫にやってきた子どもたちは、思い思いに好きな本を手にとって読んでいます。学校だけでなく、住んでいる村でも、本を読める環境を整えるというこのプロジェクトの最初の成果が見て取れます。しかしこれからの課題は、村の人たちの理解と参加により、この地域文庫が継続して利用されるようになることです。そしてそれを支えるのがブントンのような村人です。

ブントンは、「シナーとユー」がお気に入りだとのこと。その理由を聞くと、正直に生きることの大切さを教わった気がしたからと言います。また、お料理の本は、レパートリーを増やすのに役立ったと言っていました。

さらに、お米作りや野菜作りで生計を立てる村の特色を反映して、村の人から、土作り、野菜作り、米作りの本が欲しいとリクエストが来ているそうです。



『シナーとユー』
文・絵：ヴァンマイ

モン族の民話。「ラオスのこども」が出版した絵本の中でもベストセラー。蛇のシナーと結婚したユーは、蛇の夫を人間のように扱い、誠実に助け合って生活する。シナーからお守りとして授かった蛇の頭の形をしたブレスレットの力で、姉の悪だくみで身に危険が及んでも守られる。やがて姉も改心して、幸せに暮らすというおはなし。

地域文庫は役立つ

地域文庫が開くと、子どもたちは競うように好きな本を手にとって一心に読み始めます。40歳を超えたブントンは、地域文庫で初めて教科書以外の本と出会い、正直に生きることの大切さを深くしました。

一人でも多くの子どもや村の人が、熱心に本を読む子どものように、そしてブントンのように、地域文庫を利用して自らの世界を広げられるように、もっともっと本を届けたいという思いを強くしました。

村にオープンした16文庫に100冊ずつ。
1,600冊届けよう!
2017年夏募金に、ご協力ください!

ラオスには、教科書以外の本と出会ったことがない人がたくさんいます。現在、「ラオスのこども」は、開設した地域文庫16か所の維持と充実のため、1,600冊の本を届けることを目標に夏募金を実施しています。7月30日までに合計370,000円のご寄付をいただきました。心より感謝いたします。

目標は9月30日までに100万円です。皆さまの温かいご協力をお願いいたします。

文庫が地域の人たちに長く愛されるために

図書室は、学校なら空き教室を利用します。地域では、人々と当会が相談しながら、村の事務所や集会室、寺の空き部屋や物置など都合のつくところを改装し、当会が図書、備品を提供し、看板をつけます。

ところが、開設できないところが残っていました。理由は「場所がない」でした。もはや開設が危ぶまれていましたが、「今、小屋を建てています。地域文庫にします」「えっ!」

北部のルアンナムター県ナーレー郡モックチョン村からのそんな電話にスタッフ一同びっくりしながら、開設の準備を急ぎました。



モックチョン村では、村の人びとが資金、資材を持ち寄って手づくりで建てた地域文庫がオープン

人々が文庫を開こうという思いにかられるのは、新しいことをやってみたいという気持ちからでしょう。開設時、スタッフがいるいな本を紹介します。例えば料理の本を開いてみると、見ているだけでも楽しく、作ったことのない料理に挑戦したくなる。そんな新しいものに触れる喜びが私たちに伝わってきました。

また、開設後、ボランティアのお母さんが子どもを連れてきます。わが子が本を読む姿を喜ばしく思い、子どもに新しい変化が見える。これも地域文庫ならではの情景ではないでしょうか。

とはいえ、だれもが無償で運営する文庫は、人々が日々忙しい中、継続は容易ではなく、私たちは学校との連携を呼びかけています。



地域文庫に中等学校の生徒ボランティアも参加

ヴィエンチャン県のナパファー村地域文庫は、近く中等学校の生徒も利用しに来ます。なぜなら、この文庫は小学校の分室として開設され、中等学校には図書室がないからです。本を読みたい生徒と運営を支えてもらいたい村とで手をつなぎました。当会スタッフと運営を訪問して実施した研修にも地域の人々に混ざって先生と生徒が参加してくれました。そして、文庫の継続には図書の補充がなよりのエネルギー源です。

(7月15日に行った政岡ラオス駐在スタッフ報告会をもとに構成)

<出版>

豪・EU・国際NGOと連携し、図書を小学校に

ラオスの小学校の純就学率(学齢での入学)は現在98.8%と、ほとんどの子どもが学校に行っています。ところが、1年生から2年生になるときに14人に1人の割合でドロップアウトしてしまいます。その大きな理由として、多様な文化と言語を持つ社会にあって学校ではラオス語・ラオス文字のみを教え、かつ教員の質、教材が不足していることが指摘されています。

その改善策の一つとしてラオス政府がオーストラリア政府、EUとともに2015年からの10年計画でBEQUALプロジェクトを進めています。BEQUAL(Basic Education Quality and Access in Lao PDR)は、学校の整備がとくに立ち遅れた66地域への支援に力を入れ、カリキュラムの改善や教員のトレーニングなど小学校の教育の質向上に取り組んでいます。

「ラオスのこども」は同プロジェクトの一部を担う4つの国際NGOに、これまでに評価の高い、例えばラオス語を初めて学ぶ少数民族の子どもにも親しみやすい『なんのどうぶつ? 文字絵本』シリーズ、子どもたちに大人気の紙芝居『ふうせんがほしい』をはじめ13点、合計6,000冊を2月~5月に提供しました。多くの支援によって蓄積されたラオスの子ども向け図書の多様な出版とその活用についての知見が、このようにして活かされています。



文字絵本



ふうせんがほしい

ありがとうございます。クラウドファンด์達成!

4月17日に開始したクラウドファンด์プロジェクト「ラオスの子どもたちに夢と希望を! 1万冊の新しい本を届けたい」(目標金額60万円)は、5月31日までに、52人の方から、目標を上回る66万円のご支援をいただき、無事達成し、終了しました。本当にありがとうございます。

開始当初は達成できるか不安でしたが、少しずつ増える支援金額とともに寄せられるあたたかい応援メッセージに支えられました。お電話やメールで応援の気持ちを直接伝えてくださった方もいて、本当に励まされました。

冬募金でのご協力分と合わせて、4種類の本を合計10,000冊出版します。印刷は8月中に完了予定で、その後、ラオス各地の学校図書室などに届け、子どもたちが手に取ることができます。ご支援はもとより、情報拡散にもご協力いただいた皆さまに、心より感謝申し上げます。

代表 チャンタソン インタヴォン

<イベント>

ラオス語絵本をつかってラオスの子どもたちに

7月1日(土)、沖電気工業株式会社本社で、第18回「ラオス語絵本をつかってラオスの子どもたちに送ろう!」を開催しました。社員の方19人が合計60冊の絵本を作り上げました。作成した絵本は「OKI愛の100円募金」からのご支援で開設した中等学校2校の図書室をはじめ学校図書室などに寄贈されます。

「ラオスのこども」は、日本語の絵本にラオス語翻訳シートを貼ってラオスに送る「ラオス語絵本プロジェクト」への参加を呼びかけています。個人やグループでの参加のほか、講演とセットにして学校や企業で実施することも可能です。日本で身近にできる国際協力に、ぜひご参加ください。



今年もラオス語図書が大好評!

5月27日(土)・28日(日)、「ラオスフェスティバル2017」(東京・代々木公園)に出展しました。当会がラオスで出版している図書の販売は今年も大好評。「この本、学校の図書室で読みました」と懐かしそうに話してくれるラオス人留学生もいました。



ラオス語版『はだしのゲン』で平和を訴え



7月22日(土)、川崎・新百合ヶ丘で開催された平和・国際フェスタ「ハートカフェ2017」(主催:生活協同組合パルシステム神奈川ゆめコープ)に出展し、当会が出版したラオス語版『はだしのゲン』を展示しました。ラオスで学校図書室に広く配付しており、子どもたちの読書感想文を紹介しました。ゲンのお母さんを大切にしたい気持ち、地域の人がゲンに理解を示してくれたこと、原爆の悲惨さへのショックなどが、ラオスの子どもたちの心に残ったようです。

「どの仕事も本当に好きなんです」

スパポーン ティッサニャー／ラオス事務所2014年12月入社

ニックネームは「スアイ」。仕事を覚えるのが早く、会計、書類作成、図書セットの準備、子どもたちや先生方との読書推進活動と幅広く活躍し、地方での業務も自らが中心となって進めています。通勤はバイクに乗って1時間（ラオスではかなり遠い）。仕事が忙しいときは同僚のパンさんの家に泊めてもらうこともあります。



ホアパン県サムヌア郡生まれ、5人きょうだいの4番目。ホアパン県「子どもセンター」に子どものころよく通っていて、「『カンパーと小さいお化け』の本が大好きで、みんなでやるスポーツや音楽の活動も楽しみでした」。このころの体験が今の仕事の原動力になっているとのこと。

ラオス国立大学自然科学学部数学科に進み、卒業後、ヴィエンチャンの中等学校で「ボランティア教員」になりました。教員不足を補うもので、手当が出るか出ないかは校長の裁量しだい。手当は支給されてもごくわずかで、とても生活していける金額ではなく、スアイさんも月に25万キープ（約30ドル）のみだったとのこと。3か月勤めたところで、ALC（ラオスのこども）がスタッフを募集しているのを知り、応募しました。

表紙の写真

早朝、黄色の僧衣に身を包み、鉢を抱えた僧侶と若い見習い僧の行列がやってきます。人々は道端に膝をついて、もち米飯などを喜捨します。それは、親から子、子から孫へと受け継がれている、ラオスのどこでも見られる風景。人々は明日の朝もまた夜明け前からもち米を蒸し、僧を待つのです。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ラオスのこども通信 70号

2017年8月発行 編集人：森透
発行：Action with Lao Children / DeknoyLao
(認定) 特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603
e-mail: alctk@deknoyalao.net
http://deknoyalao.net
都営地下鉄浅草線 西馬込 南口下車 徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494

事務所での仕事ぶりはテキパキ、キリッと。子どもたちにはやさしいおねえさん。そのギャップもまた魅力的。「活動の中で一番好きなのは?」と聞いてみたら、「折り紙、紙芝居、スーン（詩の詠唱）、歌に合わせて踊ること、子どもたちと一緒に劇をやること」と、次々に出てきました。一つに絞り切れないそうです。

（聞き手：赤井朱子／東京事務所）

メコンのほとり染

ラオスの染織の魅力

今なお「手織り」が盛ん。これがラオスの織物の魅力の一つだと思います。少し郊外に足を伸ばせば広々とした空と大地、そして道沿いの家の軒先などに織り機がある風景が現れます。織物の柄は、信仰や習慣、動植物など暮らしに密接にかかわるものが表現されていきます。

ラオスの織物文化の継承と女性たちの自立を目指しホアイホン職業訓練センターは1998年に設立。活動の一環として、伝統的なモチーフと精密な織りの技術の継承を目的とし、古い織物柄の再現を試みています。先祖たちが生み出してきた織物には色・モチーフの組み合わせやそこに込められた思いなど教わるものが多くあります。織物を始める準備として、まずは糸の染色から始まります。すべて天然染料を使います。ラオスの豊かな自然からいただく色です。主には藍染め、ラック虫（ピンクや赤）、ジャックフルーツの木の幹（黄）、紅木の種（オレンジ）、マークフーモー（カーキ・日本にはありません）また近年始まったとされる玉ねぎの皮（茶）、マリーゴールド（カーキイエロー）などがあります。染め上がった糸は織りを担当する女性によってラオスの伝統衣装であるシン（巻きスカート）やパービアン（正装時に肩からかける布）に織り上がっていきます。

センターでの染織作業工程は見学可、またスカーフ染めや手織り体験もおこなっています。街中の喧騒から一転、緑豊かな敷地内でラオスの伝統織物にぜひ触れてみませんか？

富田絃子さん／ホアイホン職業訓練センター職員



1930年代のシンの織り柄。センターで製作・復刻



草木染めの材料（左上：黒檀の実、右上：カイガラムシの分泌液、左下：ジャックフルーツの木の幹、右下：紅木の種



藍染

ホアイホン職業訓練センター（ヴィエンチャン中心部から約7km）
www.houeyhongvientiane.com
Tel: (856)-21-56-0006 / e-mail: houeyhong98@gmail.com